様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月　５ 日現在

機関番号：１４１０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2022
課題番号：１８Ｋ００９６０

研究課題名（和文）近世社会における海と山の生業の有機的連関についての研究

研究課題名（英文）Research on the organic linkages between sea and mountain livelihoods in early modern society.

研究代表者
塚本　明（TSUKAMOTO, AKIRA）

三重大学・人文学部・教授

研究者番号：４０２１７２７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,800,000円

研究成果の概要（和文）：前近代の漁村や山村では、農村に比べ自然条件の規定性が大きく、多様な生業が展開した。海と山の生業は有機的につながる面が大きく、生産活動の基盤となる対象が個人の所有に分割されず、共同性が保たれる傾向にある。本研究では、志摩漁村、三重県北部の治田地区、そして熊野地域の３つをフィールドに、具体的な事例分析を蓄積した。志摩漁村については、海女漁の歴史を総合的に明らかにし（『鳥羽・志摩の海女ー素潜り漁の歴史と現在』）、また治田地区の山の共有林を巡る古文書群を整理し、報告書にまとめた。熊野地域については、生業自体の分析は今後の課題に残されたが、『江戸時代の熊野街道と旅人たち』で、地域特性の分析を活かした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
主として紀伊半島の漁村・山村を研究対象としつつも、生産・加工などの生業を通して村を越えてつながりを持つ構造、とりわけ海と山のなりわいが結びつく特質を明らかにできたことは、従来の漁村史、山村史に新たな視点を提示できたと考える。三重県南部の治田地区の報告書を通して獲得した、海と山の共有地＝コモンズ論の視点は、今後の研究に様々な形で活かせるものである。
　また、志摩の海女漁の歴史を全体として叙述し、熊野地域を交通と旅の観点からとらえ、それぞれ一書にまとめたことは、地域の魅力を明確にし、過疎地振興につながるという社会的意義を持つ。

研究成果の概要（英文）：In pre-modern fishing and mountain villages, natural conditions were more defined than in rural areas, and a variety of livelihoods developed. Many aspects of sea and mountain livelihoods are organically linked, and the objects that form the basis of production activities tend to be communalized rather than divided into individual ownership. In this study, specific case analyses were accumulated in three fields: a fishing village in Shima, the Hatta district in northern Mie Prefecture, and the Kumano region. For the Shima, we comprehensively clarified the history of ama fishing ("Ama of Toba and Shima: The History and Present of Ama Diving in Toba and Shima"), and we also organized a group of old documents concerning common forests in the Hatta district and compiled them into a report. As for the Kumano area, analysis of the livelihood itself was left for future work, but analysis of regional characteristics was utilized in "Kumano Kaido and Travelers in the Edo Period.

研究分野：日本史

キーワード：海と山　漁村と山村　複業　紀伊半島　海女

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

「近世社会における海と山の生業の有機的連関についての研究」（研究成果）

１．研究開始当初の背景

戦後史学における江戸時代の民衆社会の研究は、主に農村の百姓を対象に進展した。これは、領主と民衆間の関係が検地による土地の把握と、その地代としての米納年貢徴収を基軸としている以上、当然のことであった。だが 1980 年頃から、現実の都市化社会の進行を背景として、吉田伸之、塚田孝らを中心とする研究グループにより大都市社会の研究が活性化し、江戸時代における町人の役割が大きく評価されることとなった。

だが、人口規模では大きくはないものの、社会の生産関係のなかで不可欠な役割を果たしていた海と山の民、漁村や山村の研究は、大きく立ち後れていた。日本は海に囲まれた「島国」であり、また国土の大半を山林におおわれた地理的特質からも、日本社会全体の歴史的な生産構造をとらえるためには、海と山を基盤とする生産活動の特質、平地農村を含めてその関連性を研究することは、極めて重要だと思われる。

稲作農耕民のみで日本社会を論じる弊害は、中世史家の網野善彦が夙に強調したことであるが（『日本社会再考ー海民と列島文化』小学館、1994、『日本社会の歴史』岩波新書、1997、他）、近世史研究においてもその課題は乗り越えられてはいない。

言うまでもなく、これまでも漁村、山村の歴史研究は蓄積されてきている。だがそれらの多くは、農村との違いを意識するあまり、漁村あるいは山村各々の特質を分析する傾向が強く、他の生業との関わりや漁村と山村とのつながり、あるいは農村や都市との関係を検討する観点は弱かった。

例えば、漁村が一般的に半農半漁的な集落形態を取ることは従来も指摘されてきたことだが、それはひとつの村落内で地域的な分離が図られているという理解がなされている（近世漁村に関する近年の重要な研究成果である後藤雅知『近世漁業社会構造の研究』、山川出版社、2001 年、など）。

だが史料に即して実態を見れば、漁業のみを行う「純粋」漁村集落などほとんどなく、出漁の合間に農耕や山仕事をする漁民は珍しくない。この点は半世紀以上前に、膨大な資料を収集しつつ水産経済の観点から研究を行った羽原又吉氏が指摘していることであり（『日本漁業経済史上・中・下』、岩波書店、1952～55）、この視角を改めて継承すべきである。

また漁業、林業の比重が高い村では、穀物を農村からの移入に頼らざるを得ず、同時に生産物の売却には、都市との取引関係は不可欠であった。一方で一般農村でも、燃料や肥料の確保を通した山村・漁村とのつながりがあった。こうした流通構造抜きに漁村、山村はもちろん、一般農村や都市社会も成り立たない。

山村については、江戸近郊の山間地域を対象として生産構造を分析した加藤衛拡により、検地帳に高が付されない山林の焼き畑化と、商品経済を伴う山村のありようが明らかにされた（『近世山村史の研究』、吉川弘文館、2007 年）。また、大石一雄の江戸への薪炭供給に関する研究も注目されよう（「江戸市場における薪炭流通と幕府の炭会所政策」『徳川林政史研究所研究紀要（昭和 58 年度）』、1984 年、他）。

こうした成果にも学びつつ、主に近世社会につい生産活動自体を通した海と山の不可欠なつながりに着目し、農村との関係を含めて、漁村と山村の生業の有機的関係を検討することが、本研究の課題である。

２．研究の目的

米納年貢に基盤を置く江戸時代の地域社会像は、稲作農村を中心に描かれてきた。だが、漁村、山村で生計を営む漁民や山の民は、当時の生産関係のなかで不可欠な役割を果たしている。本研究では、江戸時代の漁村、山村における海と山の生業の関連性を、一般農村や都市との関係を含めて分析・検討する。

漁業の合間に畑作や山仕事に従事し、漁獲物の加工や小商い、季節により各地へ出稼ぎにも赴くなど、いわゆる漁村の住民の生業は多様な形態を持つ。魚付き林の存在から分かるように、山林の海への影響を漁民らは意識していた。一方、燃料や材木の供給地である山村も、外部との流通関係抜きには成り立たない。こうした有機的な関連性を、複数の生業の組み合わせである「複業」という概念をキーワードとして、紀伊半島の伊勢志摩地域、熊野灘沿岸、北勢地域の３つをフィールドとして検討し、全国的に普遍的な漁村・山村の成立構造と、当該地に固有の特質を析出する。

３．研究の方法

伊勢・志摩、尾鷲・熊野、そして三重県北部の北勢いなべ地域を主なフィールドとして設定する。まず伊勢・志摩地域は、参宮文化が栄えた神宮門前町の需要を背景に、海女漁を中心とする漁業が発展した。世界的にも珍しい女性の素潜り漁は、日本列島でも鳥羽・志摩が最も盛んな地だが、それは参宮文化との関わりで成り立っている。同時に農地が少ない当地では、低山地帯の森林資源の利用も盛んであった。海女漁村に生活する人たち、特に女性たちは、漁業以外に多様な生業に従事していた。

この地域を研究する上での史料は、鳥羽市立海の博物館、志摩市志摩町越賀区郷蔵、伊勢の神宮文庫を始め、未整理の古文書が多数残っている。尾鷲・熊野地域は、海岸線を中心に漁業と港を核とした舟運が発達するとともに、後背地は日本有数の林業地帯であり、紀州藩の徴税制度にも規定され流通経済が展開した。この地域には、尾鷲市中央公民館郷土室が収蔵する尾鷲組大庄屋文書が、全国的にも屈指の質・量を誇る歴史資料であり、当地の生産や流通構造を見る上で有益である。北勢地域は、いなべ市の治田郷を中心に検討する。治田郷の周囲に広がる山地は江戸時代初期には日本でも有数の銀銅鉱山であったが、豊かな山林に恵まれた当地には鉱石採掘以外の山の利用に関する史料も多く、また現在でも財産区と並行して強固な入会権が存続している全国でも稀有な地域である。

これらのフィールドについて、まずは基礎的な史料調査を徹底的に行う。鳥羽市立海の博物館の所蔵文書、志摩市志摩町越賀郷蔵文書、御浜町裏の屋敷文書、尾鷲組大庄屋文書、いなべ市治田区域の古文書が、現段階では主な対象となる。

その上で、以下の観点からの分析を行う。

①、魚介や燃料需要に伴う漁村・山村との連関と、舟運を中心とする流通構造の検討。これは、主に神宮門前町の宇治・山田を磁極とする、熊野灘から志摩半島に掛けての漁村・山村との関係が中心となる。

②、漁村・山村地域の食料需要に伴う、他地域間の関係に関する分析。炭水化物を自給できない漁村・山村の食料確保、また魚介・海藻類の消費の在り方などが課題となる。

③、燃料の生産と流通に関する研究。江戸時代の都市部を中心とする燃料需要の増大に伴う生産・供給体制の検討を行う。その際、杉や檜など針葉樹を中心とする植林＝材木生産と、広葉樹の雑木を資源とする薪や炭との生産の対立構造などに留意する。

いずれの課題においても、地域内、村内、家族内、そして個人単位でも見られる「複業」形態、すなわち漁業や林業に純化しない、様々な仕事を合わせ行うような労働形態に注目し、それによりこの時代における海と山との有機的連関の実態を明らかにする。また、生業に対する領主側の課税形態、村入用の在り方にも留意したい。最後に、主に漁村を中心として、他の生業との有機的関連性を全国的な規模で比較検討し、類型化を図り、本研究のまとめとする。これにより、当時の社会において普遍的に見出せる漁村・山村の連関性と、紀伊半島沿岸の漁村・山村に特有の地域的特質を明らかにする。

４．研究成果

まず初年度(2019 年度)は、志摩地域における女性の素潜り漁について、江戸時代の海女漁の実態、山仕事や出稼ぎなどの「複業」形態である点などを中心に、原始社会から現代までの歴史的実態を通史的にまとめ、『鳥羽・志摩の海女ー素潜り漁の歴史と現在』（吉川弘文館、2019 年 6 月）として上梓した。中世以前、近代以降のことを含めて検討することで、近世の海女漁業の時代的特質を明確にすることができた。

『三重県史　通史編（近世２）』（三重県、2020 年 3 月）において「八章　海と山に生きる人々」の執筆を担当し、海の生業に関しては、現三重県域の伊勢湾、鳥羽・志摩、熊野灘におけるそれぞれの漁業の特質、村社会との関係、地域間流通の実態等をまとめ、山の生業については、林業のみならず、植林と並行して行われた杉葉粉、椎茸の生産など、紀伊山地に連なる山間地の生業の特質をまとめた。加えて、動物を討つ猟師の存在形態や村内における身分的位置、熊野の紀和と北勢の治田に展開した鉱山での生業についても検討した。これらにより、本研究のベースとなる見取り図を示すことができた。

2019 年 11 月に韓国ソウル（国立民俗博物館）で開催された近代東アジアの漁業文化に関する国際シンポジウムに出席し、「三重（鳥羽・志摩）海女の朝鮮出漁とその影響」と題して報告を行った。近世段階から多種類の獲物を取り、働き方も多様である（「複業」）ことを前提に出稼ぎがなされ、テングサを求めて朝鮮出漁に至った経緯を述べ、国内外の研究者と質疑応答、議論を重ねた。そのなかで、多様な海藻を採取する日本漁業の特質、また種による漁獲法・流通の違いなどの論点を見出すことができた。魚介や海藻については、生育しており漁獲が可能であっても、獲るとは限らない（未利用状態にとどまる）という点も、重要な論点として確認した。

また、近代東アジア経済史を専門とする研究者との議論のなかで、19 世紀以降に日本各地の漁村で「テングサバブル」とも言うべき価格急騰と生産額の飛躍的増大があり、それと同時代に東アジア世界で発生した海産物の流通構造の大規模な転換という現象との連関、つまりローカルとグローバルの劇的なつながりを意識できたことは、その後の研究の方向性を規定する大きな収穫であった。

北勢地域のいなべ市治田文書について、治田地区が現在も有する財産区・入会権の源流を江戸時代に検証すると共に、鳥羽・志摩の磯場漁業との共通性を見出し、コモンズ論との関係で新たな視点を見出した。また、山から切り出される石灰が、近隣農村の肥料として盛んに用いられ、高価値商品となったことにも注目し、それらの成果を講演「近世・近代の治田のあゆみー古文書から見る治田の姿」として地元住民向けに報告した。

2020 年度は前年度に引き続き、志摩漁村を対象に、潜水漁に従事しつつ、海と陸での多様な働き方を営む「海女」に焦点をあて、特に海藻をめぐる生産・流通構造に注目し、分析検討を進めた。

志摩国内部でも地域差があるが、志摩半島の西南端の先島半島では漁獲物全体に占める海藻の比重が極めて高く、近世・近代期には現代に比べて桁違いの量の海藻が収穫され、出荷されていた。海藻漁は、海中に潜水して刈り取る以外に、浜に流れ着いた海藻を拾う、また岩場の海藻を摘み取る形態があるため、その所有権（漁業権）が村共同体共有の性質を帯びるという特質がある。近代以降の漁村においても、海藻漁の収益を村が管理し、学校の維持など共同体経費にあてられることが多かった。志摩漁村特有の村税徴収制度「口銀制」も、もともと海藻漁に即したものであったことを明らかにすることができた。

海藻は乾燥させることで保存・運搬が容易くなり、他の魚介類に比し漁民に有利な商品となる。漁民のなりわいとしては、海藻を採取するだけではなく、乾燥させ、出荷用にまとめ、上方の商人と交渉し、船に積み込む作業など、「複業」を必然化させた。

幕末以降近代前期に掛けて、中国大陸を中心とした寒天需要の増大により、原料のテングサの生産、流通が爆発的に拡大した。それが海女たちの広域的な出稼ぎを誘発し、朝鮮出漁にまで及ぶこととなる。19 世紀以降に東アジアの広い範囲で、海藻をめぐる生産・流通構造が大きく転換したとの見通しも、得られることができた。

2020 年 12 月に、人類学、社会学、水産研究など多様な研究者を招いて鳥羽市立海の博物館にて「海女と海藻漁」をテーマにシンポジウムを開催し、自ら「近世志摩海女の海藻漁の特質」と題して報告も担当した。当日の質疑応答を踏まえて、2021 年 3 月に同タイトルで『三重大史学』21 号に論考を発表した。これは、その後の展開の基盤となった。

志摩の海女漁については、志摩市志摩町の越賀郷蔵文書を主に利用して分析をしてきたが、2021 年度にはその中核文書を整理し、『旧越賀村郷蔵文書調査研究事業報告書』として刊行した。史料解題のほか、海女漁に関わる主要な史料を翻刻・紹介した。

前年度の成果を踏まえ、特に海藻の肥料としての利用に注目し、史料の収集を始めた。明治初期には大坂商人との間で活発に取り引きされたアラメやテングサに匹敵するほどの量で、村内で「肥料藻」が取り引きされていたこと、アラメ・カジメのヨード加工時には、肥料としての利用から転換があったことなどを確認した。しかしながらコロナ禍のなかで史料調査が思うに任せず、このテーマでの論文作成は断念せざるを得なかった。

そこで少し方針を転換し、熊野灘の尾鷲地域で収集・蓄積してきた史料を再検討し、『江戸時代の熊野街道と旅人たち』（塙選書）として上梓した。タイトルは交通史的な内容ではあるが、旅人たちを迎える熊野の地域社会の構造を論述するなかで、本科研の研究成果を活かすことができた。

なお、2021 年 12 月には、「国境を越える海藻の流通と文化」をテーマとする研究集会を主催し、関連する議論を行った。これらにより、東アジアを射程に入れた新たな研究の展開も見通すことができた。

2021 年 10 月及び 2022 年 2 月には、静岡県下田市須崎の財産区文書を調査する機会に恵まれた。当地で長年調査を続けてきた方の御厚意によるものだが、そのなかで磯場の漁業権と海岸線の陸地の所有権とが連動し、地租改正後、現代に至るまで陸地の所有権が私有地として細分化されず、「財産区」として残っている歴史事象を発見した。2019 年度に検討を加えたいなべ市北勢町の治田財産区・入会権者組合所蔵文書の調査成果を、別の形で活かすこともできた。ただ、当該史料は地元の意向が複雑で、すぐに研究に利用できる状況にはなく、調査グループと共にまずは地元向けの情報発信を行い、信頼関係の構築を目指すこととなった。

当初は本研究を前提として、2022 年度から学際的な総合研究、科学研究費基盤（A）「19 世紀以降の東アジアにおける海藻の生産・流通・消費に関する総合研究」に移行する予定であった。だが新型コロナウイルス感染の影響により現地調査が制限されたため、本研究は 1 年間の延長を余儀なくされた。ゆえに 2022 年度は、新たに開始した基盤A研究と深く関連させつつも、従来の調査事業の集約を計ることになった。

特に前年度から始めた静岡県下田市須崎の財産区文書調査については、地元との信頼関係を構築するために 2022 年 3 月に古文書の展示・解説会を開催し、海藻漁とその加工・流通に関する説明も行った。住民の思い出話は非常に有益な情報であり、大いに参考になった。それとともに、古文書やその調査活動に対する理解を得ることができた。

また、これまで鳥羽・志摩地域や下田市須崎で調査研究してきた海女漁と比較しつつ、近年台湾で見出された海女（ハイルー）の海藻漁の報告書を検討し、議論する場を持った。その成果は、共同で論評した堀内義隆、立川陽仁との共著論文「台湾の『海女』と海藻漁をめぐって」（『三重大史学』23、2023 年）として発表した。

磯場で採取される海藻が、伝統的には食用以外に田畑の肥料として利用されるという、まさに海と山の生業の有機的連関に関する重要な視点を前年度に見出したが、それを発展的に検討した。江戸時代の農業指南書を集めた『日本農書全集』から海藻についての記事を集め、肥料としての有効性が意識されていたこと、飢饉対策の食糧備蓄としても利用されていたことなどの史実を確認した。19 世紀以降に国際商品化するテングサも、伝統的には肥料として用いられており、この観点は今後の分析視角として非常に有益だと考える。

（全体を通して）

前近代の漁村や山村では、農村に比べ自然条件の規定性が大きく、多様な生業が展開した。海と山の生業は有機的につながる面が大きく、生産活動の基盤となる対象が個人の所有に分割されず、共同性が保たれる傾向にある。本研究では、志摩漁村、三重県北部の治田地区、そして熊野地域の３つをフィールドに、さらに 2021 年度からは当初は想定していなかった静岡県下田市須崎を加え、地域差を意識しつつ、具体的な事例分析を蓄積した。

志摩漁村については、海女漁の歴史を総合的に明らかにし（『鳥羽・志摩の海女ー素潜り漁の歴史と現在』）、また治田地区の山の共有林を巡る古文書群を整理し、報告書にまとめた。熊野地域については、生業自体の分析は今後の課題に残されたが、『江戸時代の熊野街道と旅人たち』で、地域特性の分析を活かした。

主として紀伊半島の漁村・山村を研究対象としつつも、生産・加工などの生業を通して村を越えてつながりを持つ構造、とりわけ海と山のなりわいが結びつく特質を明らかにできたことは、従来の漁村史、山村史に新たな視点を提示できたと考える。三重県南部の治田地区の報告書を通して獲得した、海と山の共有地＝コモンズ論の視点は、今後の研究に様々な形で活かせるものである。

また、志摩の海女漁の歴史を全体として叙述し、熊野地域を交通と旅の観点からとらえ、それぞれ一書にまとめたことは、地域の魅力を明確にし、過疎地振興につながるという社会的意義を持つと考える。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計3件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　3件）

１．著者名 塚本明	４．巻 21
２．論文標題 近世志摩漁村の海藻漁の特質	５．発行年 2021年
３．雑誌名 三重大史学	６．最初と最後の頁 13-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 塚本明	４．巻 19
２．論文標題 書評：アン・ミジョン著『済州島海女の民族誌　「海畑」という生活世界』	５．発行年 2019年
３．雑誌名 三重大史学	６．最初と最後の頁 29-36
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 塚本明、堀内義隆、立川陽仁	４．巻 23
２．論文標題 台湾の「海女」と海藻漁をめぐって　論評：『台湾の「海女（ハイルー）」に関する民族誌的研究ー東アジア・環太平洋地域の海女研究構築を目指してー』	５．発行年 2023年
３．雑誌名 三重大史学	６．最初と最後の頁 39-70
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　2件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 塚本明
２．発表標題 海藻文化の総合研究に向けて
３．学会等名 海女研究集会
４．発表年 2021年

１．発表者名 塚本明
２．発表標題 近世志摩海女の海藻漁の特質
３．学会等名 海女研究集会
４．発表年 2020年

１．発表者名 塚本明
２．発表標題 三重（鳥羽・志摩）海女の朝鮮出漁とその影響
３．学会等名 The International Conference“Fishermen Culture of Modern East Asia and Its Development”（National Folk Museum of Korea）（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 塚本明
２．発表標題 近世の巡礼文化と地域社会ー熊野街道沿いの史料からー
３．学会等名 日本史研究会3月例会（招待講演）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計5件

１．著者名 塚本明	４．発行年 2022年
２．出版社 塙書房	５．総ページ数 286
３．書名 江戸時代の熊野街道と旅人たち	

1．著者名 塚本明（編集）	4．発行年 2022年
2．出版社 海女振興協議会	5．総ページ数 120
3．書名 旧越賀村郷蔵文書調査研究事業報告書	

1．著者名 塚本明	4．発行年 2019年
2．出版社 吉川弘文館	5．総ページ数 217
3．書名 鳥羽・志摩の海女－素潜り漁の歴史と現在－	

1．著者名 塚本明	4．発行年 2020年
2．出版社 三重県	5．総ページ数 987
3．書名 三重県史　通史編　近世2（第八章「海と山に生きる人々」	

1．著者名 塚本明研究室編	4．発行年 2019年
2．出版社 いなべ市北勢町治田財産区・治田入会権者組合、いなべ市教育委員会、三重大学人文学部塚本明研究室	5．総ページ数 162
3．書名 「治田文書」調査報告書（近代文書編）　附編　治田地区個人所蔵文書調査報告	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関